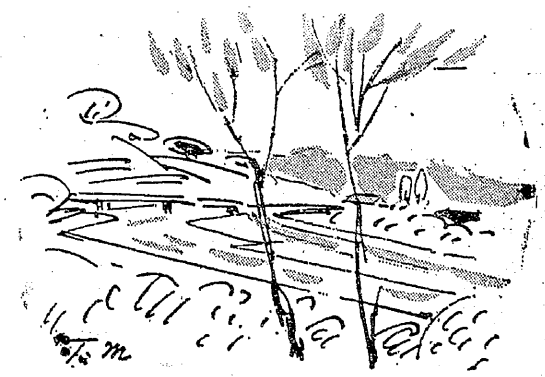
〝反戦平和のあしおと〟

宮浦　高椋龍生



聞をかたむけよう
まっ黒く　もり上がる　土の中から
みどりの　いぶきが　きこえてくる

〈土は生きている〉

なかまたちと　からだを寄せあい
がっちり　手を握り
まもりぬいて来た

この水　この土
この木　この空
このしあわせ

みんな祖先から　うけ継いだ
おれたちのもの

〈おれたち　人民のもの〉

バターより　大砲が好きな
アメリカ帝国主義と手を握る
資本と権力者ども奴
つちくれひとつだって
お前たちの　自由にさせないぞ

〈基地を返せ！　原潜を寄せつけるな〉

かれらは
非道な　戦争と
狂暴な　合理化を　人民におし
つけ

上から
この水　この土
この木　この空
このしあわせを
一瞬に　破壊し去ろうとしている

〝息子は　戦場へやるのは　いやだ〟

〈戦争犠牲はおれたちだけで沢山だ〉

〝どうちゃんは
落ばんの下じきにするのは
いやだ〟

〈炭塵爆発で殺されるのは
いやだ〉

戦争と　人殺し合理化反対！

〈戦争と　人殺し合理化は
返せ！〉

地底から　船上から
町から　畑から
反戦平和と　民主々義を守る
はたらく　なかまの
としよりの　わかものの
子どもたちの
怒号が　火の海となり
日本のみどりの大地の　すみずみから
力づよい
あしおとをたてて
湧き興って来る。

（一九六六・一・一）

〝抵抗精神〟

三川　小柳重義

なんという素晴らしい合言葉であろう……。

数多くの仲間たちの支援のもとで、世界一といわれた三池斗争を契機に自民党政府並びに三井鉱山の悪らつな手段により、三池労仂者に対する差別は勿論、転制の切り崩し・組織介入・不当労仂行為・保安無視等は今もなおとどまるすべを知らない。思えば心頭からの怒りを感じる者はわれ一人ではあるまい。

就労後は組合の果敢な日常における斗い、あるいは労仂条件に基づく各項目の要求・団体交渉・労仂組合として第二組合はむろんのこと、会社側には一歩も譲らなかった。この事実こそ正しく仂らく者が誇る〝抵抗なくして、安全なし〟の斗いの現われであることは言を待たない。

転場でも、地域でも、すべてが抵抗の一字に帰するといっても過言ではないと思う。まして生命と権利を守る斗いの勝敗を決定するものは金ではなくて、労仂者自身である。

その労仂者も人間である。人間である以上ほんとうにやる気をもち、ほんとうに根性をすえ、しかもそれが団結して起ち上がった時こそ奇蹟が実現できるものである。

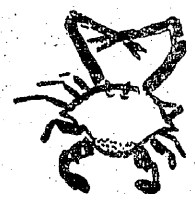
われわれは長期抵抗路線のスローガンに則って、今日まで、資本家という権力に負けぬあらゆる抵抗をこころみて来た。少なくとも無意味ではなかったと確信を深く認識し、成果を注目しなければならない。

〝抵抗精神とは〟……独占資本の反動・佐藤内閣が行なっている三矢・改憲・合理化・日韓・アメリカ帝国主義に従事して狂奔することはすべて源は一つであり、この軍事行動に対し平和を愛する国民と共に、労仂者階級の団結と統一が相まって仂らく者の基本権を勝ちとり、生命尊重と生活の安定あわせて中毒患者・遺族の生活保障を築くことこそ、緊急でかつまたその根源をたち切ることが先決であることはいうまでもない。

あくまで炭鉱労仂者の団結と抵抗なくしては権利の主張は空文字にすぎない。

二つには今日ほど三井鉱山の弾圧は目を追ってますますはげしく血迷った態度を加えて来ている。宮浦・四山の不当きわまる解雇処分が如実に示している。

この現実をするどくみきわめて一人一人がなおいっそうふんどしをしめて将来、また後につづく者たちにもこの抵抗精神こそ労仂運動発展に最大のエネルギーを発揮し、人間解放のいしづえにしたいと願って止まない。



川柳

三川　大中美風

公害へノーコメントで立つ煙
引っ張ればあく錠前でことが足り
やけ酒にあらねど心たかぶる夜
爪に火をともしやけどをしませんか

暴力はよせと野犬も云いたそう

三川　小柳重義

資本家に負けてはいないヤッケ着る
稼げばよい何も云うまい労仂者
ストせねば分らぬ会社にストをする
期待した程になかった調査団
坑内のねずみに飯を分けてやり
抵抗はするぞ三本線の歌
判決へびくともしないこの笑顔
首切りに歌を忘れた新労組
未亡人師走の風にまだ勝てず
入坑の愚者頭がまだ痛い
賃金が安い若者うんと入れ
目標はいいがしっかりせよ保安
手不足に泣く出炭のあて狂い
撤回へ一丸となり抗議する
不認可が社会政治をむすぶ綱
法廷の席で労仂歌をうたい

「コント」

「母さん」大好きよ

四山　吉野廉夫

五月に入ると、午後を六時も過ぎたというのに、太陽が社宅の西空にまだどっかとあぐらをかいている。飛び石連休の初日は上々である。

一番下の和夫は、何とか七輪をおこすと、また外に飛びだしていった。姉のひろみだけは、もうすっかり夕飯の仕度をし、部屋の中まで片付けている。しかし、高校生の昭夫だけは貫録を示すのか、すでに風呂をすませて夕刊をひろげていた。

「姉ちゃん、母さんたちはおそいな。俺は腹がへったよ」

昭夫はそういって一つ欠伸をすると、ゴロリと横になった。

「そうね。きっとゆっくり映画をみてるんよ。さきにすましちゃおうか」

ひろみは母さんのような口をきく。

「母さんたち、よせといったのにきっと四本立の映画だよ。帰りは夜中だな」

別になれているので心配はないが、今日、ひろみたちが兄弟ばかりで夕飯の仕度をするのには訳があった。メーデーに参加する母たちに、まっすぐ社宅に帰らず「ぜひ映画をみてくるんだ」と進言したのである。もちろん、母の小使い銭は内証でひろみの財布の中からだしてやった。

「うわー嬉しいね。父さんとデートするごして映画をみられるなんて、何年ぶりじゃろか」

母は映画をみるという、たったそれだけの単純なことで大いにはしゃぎ「パチンコがいいぞ」と、いった不服そうな父をせきたて、巻ずしに魔法びんまで持ち出して出かけたものだ。ひとみはその時母さんが口紅とお白粉を、そっとバックにしまうのを見て、本当にいとしいと思った。内証の土方もグチ一つこぼすでなく、何時も汚れ放しの母さん。「いいよ、いいよ。あたしは父さんと違って身体の丈夫なのが取柄でね」というのが口ぐせで、グイグイありったけの力で今日まで親子五人をひっぱってきた、といってもいい過ぎではなかった。ひとみは、その馬力をかけるシンバリ棒が、何時か折れるんではないかと、ハラハラさせられる事が多かった。

ひろみたちが夕飯をすませて間もない七時ちょっと前に、母親の久枝が一人で帰ってきた。映画帰りにしては早すぎる時間である。

「ほら和夫、おみやげの饅頭だよあー今日は本当につかれたね」

久枝はそういうと、本当につかれたように畳の上に座りこんでしまった。

「一体どうしたの。父さんとは一緒じゃなかったのね。またパチンコだわ」

「うん、そうじゃろ。父さんはあれだけが楽しみだからね」

久枝は投げ出すようにそういう見舞うことだった。

「それでね、幸い巻ずしの残りはあったし、茂さんも元気でね。二人運れで延命公園に行ったよ。アベックのピクニックだね。ハハハ……」

久枝は身体が大きいので、笑い声も大きい。ひろみはあっけにとられた。しかし、あんなに映画をみることを喜んでいたと思うと、それをすげなくすっぽかした父が本当に憎いと思った。その父親である正男は、八時過ぎてからフラフラになって帰ってきた。今日は馬鹿にツイたとみえて、酒をのんでいる。鼻歌で〝お座敷小唄〟なんか鳴らしていい景気である。

「ようー、母さん帰っていたのか。今日はすまん、本当にすまん」

正男が苦笑いしながら、しきりにあやまっているところをみると、やはり、子供たちのすすめた今日の映画見物を、すっぽかしたことが気になるらしい。

「もういいんですよ。ほらほら父さん、上衣を脱ぐんですよ。」

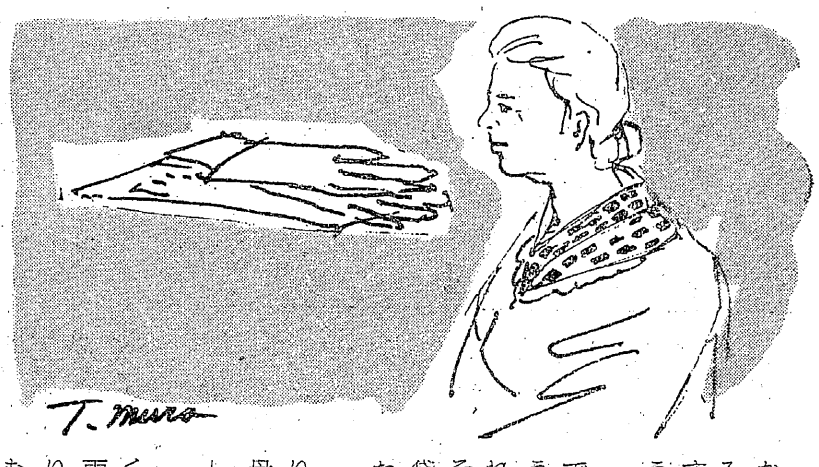
久枝は馴れた手つきであやす。

就労後、説得にのって第二組合に脱落していたら保安係員は間違いなかった正男。しかし彼は、あたりまえのようにして、三池労組員として頑張り通す。それにしても、あまりにも弱々しい正男の肩幅である。

その支えられる土性っ骨のすじ金だけが、どうにか四十五才の彼の肉体を持ちこたえているに過ぎない。ひろみは市内の小さな商事会社に勤めているので、労仂運動のことは少しも解らないが、父親が男として、労仂者として、初心をあくまでも貫き通す意志だけは、大いに敬服した。しかも斗いの中で、鉢巻をして飛びまわる父親は妙に若々しく、男くさいのもたくましく映る。

「さあ、コロッケがさめますよ。いっしょに夕飯を戴きましょう」

久枝は、夫の前では決して身体をくずさない。あくまでも世話女房である。今日の楽しみをはぐらされたことに怒りもせず、八時過ぎまでも、夫の帰りで夕飯を待つのである。ひろみは、そんな母の挙動を見ていると、つくづく母が底抜けのお人好しで、苦労性だなと思った。



と、行儀悪く臥くそをほじくり横になってしまった。そして、和夫に肩をもませながら、今日の出来事を話しだした。それによると、メーデー会場の散会までは腕を組んで一緒だったが、その後をうまくボカされ、一人になってしまったというのである。仕方がないので一人で映画をみようと思い、館の前を行ったり来たりしたが、何だかお金がもったいなくなり、やめることにしたという。そのかわり素晴しい思いつきをした。それは、会社の保安サボでガス患者にされてしまった、三川鉱の義弟を

「あら母さん。父さんのポケットにストッキングと白い手袋があるわ」

ひろみは、不思議なこともあるものだと、きょとんとした。

「どれどれ、見せてごらん」

久枝は白い手袋と靴下を包装紙から手に取ると、軽く笑い出した

「母さん、これはきっと今日映画をすっぽかしたお詫びに、母さんにおみやげを買ってきたんだわ。いやーね」

ひろみは、こんなことで妥結はしないといった顔つきで父をにらんだ「うんにゃ、案外これはひろみへのおみやげかもしれないよ」

久枝はこともなげにいう。

「母さん、違うよそれはねー」

お茶をのんでいた正男が、慌ててそういいかけると、久枝が急いでそばにかけより、軽くどこかをつねって目くばせした。

「いいから、いいから。これはひろみへのおみやげですね。そうでしょう、お父さん」

久枝は、あくまでも笑いながらいう。そして、ふくれているひろみにその靴下と白い手袋を手渡すのだった。

「母さん……。ありがとう。あたし母さんが大好きよ」

ひろみは、ふくれだった久枝の両手をしっかり握りしめながら何度も何度もそうつぶやいた。

（終）